
俺がお前で、私がキミ！？

ねこまたたび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺がお前で、私がキミ!?

【Nコード】

N1978W

【作者名】

ねこまたたび

【あらすじ】

二段ベッドの上段で寝ていたら目の前に自分そっくりな美少女が!?!それにここは機械の代わりに魔法が発達してるだも!?!も!?!、何これ新手の洗脳か!?! 何故か自分が二人いる超痛快(?!?)魔法バトルアクションラブコメディ(?!?) ネタストーリー!!! はじまっちゃうZO☆「キメエ!!!」「ひでえ!!!」

第一話「自分そっくりな美少女…って、ありですか？」（前書き）

初投稿です！

ベースは在り来たりな異世界ですが、現代的ネタやマンガ・アニメネタを多く含みます。

御了承くださいませ。

第一話「自分そっくりな美少女…って、ありですか？」

俺は東崎裕也。ひがさきゆうや

両親がフリーダム過ぎて何故か怒られずともまともと思える人間に育った高校生だ。

俺には妹がいる。

名は東崎夕凧。ひがさきゆうな

無口で言葉数少ないが、鼻肩目無しでもとても大人しく良い子な小4だ。

先ほども言ったが、両親はフリーダム：悪く言えば放任主義だ。

かと言って育児放棄では無い。

一日三食は作ってくれるし、話し合ったり、笑いあったりもする。

両親が言いたいのは「何をやっても良いが、行動に責任を持ち、その行動に後悔するな」とのこと。

そ言葉の成果、「無茶はしても無理はするな」、「無茶を通して道理を蹴飛ばす」、「多少の無理は無茶の範囲内」などを覚えた。

そんな弾丸やら鉄砲玉とか言われてそんな俺ではあるが、家族以外に隠していることがある。

俺はオタクである。

オタクと言っても種類や主義は様々だ。

鉄道、医療、音楽に軍事。

アニメにゲーム、人形から絵、和菓子や料理もいる。

しかし、現実で暴走する阿呆や愚か者の所為で犯罪者予備軍とされ、某都のお偉いさんは一般漫画まで規制を始める始末。

：おっと、話が逸れたな。

俺は主にアニメにゲームだ。

主に「熱もの」：つまり胸が熱くなれるものが主体だ。

魔法戦闘に銃撃戦、巨大ロボ対決にバトルのインフレ化！

推理や弁護による論破！最大火力で一騎当千！！公式チート、覚醒状態万歳！！！！

：んんっ！すまん、取り乱したな。

その他にも俺が密かに掲げている言葉がある。

「可愛いは正義！キュート・イズ・ジャスティス！」

とかの、その類だ。

可愛いは正義。犯すものではなく、愛でるものであると断言する。

・・・大いに話が逸れたな。

俺達家族は七階建てのマンションに住んでいる。

そこで起きた、不思議な出来事・・・

では皆の衆・・・

「・・・・・・・・んっ・・・んう………」

「・・・（ダラダラダラ）↑汗が滝のように流れる音

目の前に、自分そっくりだけど美少女な方が隣でスヤスヤ寝ていた
ら…どうします？（汗

第一話「自分そっくりな美少女…って、ありですか？」（後書き）

はい、導入部分のみです。

不定期更新ですが、頑張ります。

ではまた…

番外編『設定資料』（前書き）

兄妹二人の『現時点での』設定資料です。

番外編『設定資料』

設定資料

東崎 裕也

ひがさき ゆうや

男

18歳

高校三年生（最終学歴。現在バイトしかない「ぷー太郎」）

好きな物

美味しい物、ゲーム、アニメ、可愛い物

嫌いな物

ゴーヤ、菌、虫、ちくわ（嫌いなわけではなく若干苦手なだけ）、

高所、幽霊

身長

173cm

体重

64kg

自分主義と言い張るが困ってる人を見ると、無意識のうちに助け
しまう「一応」善人。

いろいろな変な影響をマンガやアニメから受けており、少し暴走し
がち。

大事な物に危害が加わると某初号機のように暴走する。

ちなみにシスコンで、もし自分に恋人が出来たら「尽くし、尽くさ

れる間柄になりたい」とか：

東崎 夕風

ひがさき ゆうな

女

10歳

小学四年生

好きな物

美味しい物、本、兄、猫

嫌いな物

虫、苦い物、幽霊

身長

136cm

体重

（この項目は消されている）

『大人しい良い子』を素で絵にしたような女の子。

無口無表情で、言葉数少ないが多彩な才能を発揮でき、どちらかというと夕風の方が裕也より優れていたりするが、それは全て自分に対する兄への負担を軽減させる為だけである。

平時は常に本を読んでおり、ジャンルは雑食、最近では徐々に兄の思考に染まりつつあったりする。

ちなみにブラコン。兄の恋人は自分が認めた人でないとダメらしい。

第二話『妙な安心感があるのは自分だから』（前書き）

早くも第二話です。

タイトルで分かっちゃうかな？

第二話『妙な安心感があるのは自分だから』

「すー…すー…」

「……（ガタガタガタ）」↑どうすれば良いのか解らなくて震えだしている音

前回に引き続きすまない。

東崎裕也だ。

こんな状況、普通じゃあり得ないのでどうすれば良いのか解らないんだ…

じゃあ抜け出せようラッキーすけべ野郎？バカを言え。脚が絡みついてるんだよっ！！

相手の格好は

下着＋ワイシャツ一枚『のみ』↑ここ重要

………拷問か？

これ何かの拷問か？

そうだろう？なあ、そう言ってくれよ…違う、だと！？

嘘だと言つてよバアアーニイイー！！

と、取り敢えず素数だ。素数を数え…素数知らぬええ…orz

「………（じー）」

「………！？」

不意に目の前の美少女とバッチリ目が合う俺。
いや、だからどうすれば!?

「・・・やあ（ー、）」

「・・・ど、ども（ー、;）」

何で某ショボンハウスの挨拶っぽいんだよ!?
このしたり顔を見る限り確信犯なのか!?

・・・。。。。。。。

「この場合、私は叫んだ方が良いかな?（キリッ）」

「何でもするからやめて!」

何とか彼女の叫びを止めることに成功。
舌打ちとか聞こえないんだからねっ!

「さて、起きるのが面倒なのでこのまま質問させていただくが…」

「いや、起きろよ」

「パーフェクトだ（キリッ）」

「感謝の極み（キリッ）」

彼女のさり気ないボケに思わずツツコミを入れる。
え? 何この子ノリが最高。

「君は誰なんだ?」

「よっと…まずは其処からか。私は『ひがさきゆうな東崎祐奈』」

・・・は？

妹と同じ名前…だと？

「して、キミは？」

「…………俺は東崎裕也だ」

「…………何だと？」

この反応からしてまさか…！

「お前の子の名前と俺の名前を同時でいうぞ！」

「ああ…！」

「「せーの、

『ひがさき ゆうや』！！

…………！」

まさか…冗談だろう！？

俺の頭の中で不可思議な出来事が想像とともに形をパズルの様に変えて行く。

同姓同名…これならば簡単に説明がつく。

しかし、こうも顔がそっくりな同姓同名がいるのだろうか？

探せばいるだろうが、この状況はそうはいかない。

恐らく、双方共に『寝ている所に知らない（男性／女性）がいる』という状況だ。

俺は確認の為に目の前でも思案中の彼女に声を掛ける。

「祐奈…でいいか」

「ん、ああ」

「いくつか確認させてもらうぞ」

「私からも頼む」

「わかった」

順にいくとしよう。

まずは俺からだ。

「無茶はしても？」

「無理はするな」

ふむ…即答か。

次は彼女からだ。

「ではいくぞ。無茶を通して」

「道理を蹴飛ばす」

彼女も納得した表情だ。

そして俺達は、交互に合わせていった。

裕也「多少の無理は」

祐奈「無茶の範囲内」

祐奈「寝耳に」

裕也「熱湯」

裕也「猿も木から」

祐奈「撃ち落とされる」

祐奈「犬も歩けば」

裕也「埋蔵金」

裕也「河童の」

祐奈「塩焼き」

祐奈「耳に」

裕也「大声」

裕也「ネコに」

祐奈「鰹節」

祐奈「千里の道も」

裕也「飛行機で楽々」

裕也「サイクロン！」

祐奈「ジョオオカアアー！」

祐奈「俺！」

裕也「参上！」

裕也「プテラ・トリケラ・ティラノツ！」

祐奈「プ・ト・ティラーノザウルース！！！」

祐奈「可愛いは」

裕也「正義！」

裕也「キュート・イズ」

祐奈「ジャステイス！」

祐奈「流派、東方不敗は！」

裕也「王者の風よ！」

祐奈「全新ッ！」

裕也「系列ッ！」

祐奈・裕也「天破侠乱ッ！」

裕也・祐奈「見よ、東方は…赤く燃えているうう!!」

ま、間違いない…

こいつぁ、俺だ！

平行世界とか、あるかどうか曖昧だったが…この目の前にいる美少女、間違いなく俺だ!!

裕也「しかしなぁ…」

祐奈「うむ…」

「「妙に納得してしまうのは何故だ？」」

この妙な安心感は何だろうか？
そう思っていると…

「「（兄さん／姉さん）！！この子はもしかしたら平行世界の…」」

「「キエアアアアア！同じ顔が」」

「「近所迷惑です」」

「「あ、すみません」」

あ、そうか。

自分だから気にせずネタに走れるのか。

第二話『妙な安心感があるのは自分だから』（後書き）

次回も急展開でござるの巻だったり。

第三話（取り敢えず服を買おうじゃないか）（前書き）

連投第四弾ですね。

第三話（取り敢えず服を買おうじゃないか）

祐奈「それもこれも、全てディケイドってやつ^の仕業なんだ」
裕也「何だって！？それは本当かい！？」

「「違うから」」

初っ端からネタで始まってすまない。

東崎裕也だ。

…あれ？俺毎回謝ってね？

まあ、それはともかく祐奈の弟の名前は「東崎優弥^{ひがさきゆうや}」であった。
読みは同じだが、漢字が違うのか…

あのあと話し合った結果、お互いの相互点を書き出した。

・俺と祐奈の違い
性別
体型

…うん、それだけなんだ。
ちなみに夕風と優弥も同じ結果になった。
しかし、ここで大きな違いが出た。

魔法の有無である。

俺達の世界が機械に発達した世界だとすると、祐奈達の世界は魔法

や魔術が発達し、機械は『魔道具』として存在し、人知を超えた魔物もいるということだ。

俺は震えた。

恐怖ではない：歓喜だ。

求めた世界がここにある。覚悟が必要な世界がここにある。

誰の仕業かは知らないが、こればかりは感謝の極みだ。それも、今すぐ祭りを開きたいぐらいに俺は大きく歓喜の声を上げたい。

祐奈「しかし、キミ達自身がこの世界に来たとなると、服が無いな：幸い、今日は休日だ。優弥！母さん達起こして二人の買い物にくぞ！」

優弥「わかった：！」

ちなみにこの世界の両親もフリーダム過ぎるようだ。

??????Bパートへ??????

俺達兄妹と、この世界の祐奈達の家族と共に街に買い物へ来ていた。街並みは俺達の世界と変わらず、強いて違いを上げるなら、俺達の世界より緑が多いことだ。

「まさか大きい息子が出来るなんて…嬉しいわ〜♪」

このぽやぽやとした女性が我らが母上様、ひがさきゆうこ「東崎遊子」である。

「家族が増えることは良いことだ」

そして言葉数少ない厳格っぽい男性が我らが父、ひがさきなおや「東崎直矢」。

何が驚いたって、字も性格も性別も一緒なのだ。俺達の世界とこの世界とで。

逆に安心してしまう物があたりもする。

ちなみに、今俺たちは寝間着の上に体がすっぽり入るコートに来て
いる為、寝間着と気付かれにくくなっている。

季節が春でよかったよ…

さて、買い物を済ませてしまおうか…

〜〜家族買い物中〜〜

なかなか俺好みの服が多くて驚いた…

今の俺の服装は

白いワイシャツ

赤いネクタイ

黒いベスト

黒いスラックス

黒いソフト帽

…要是某Wのハーフボイルド探偵の格好だよ。いいじゃん、かつこ良いじゃん。

そこで何を思ったのか、祐奈の格好は、所謂…某Wの検索少年の格好だ。

…強ち間違っちゃいないんだが、周囲の目が…(汗

そして夕風の格好は俺の格好のソフト帽とネクタイが無い状態の服装だ。

優弥の格好は白黒のフードパーカーに群青色のズボン。パーカーの中は黒いシャツという格好だ。

母さんの格好は黒いワンピースの上に白いベスト。

父さんの格好はシンプルにブラックグレーのスーツだ。

そんでもって今はファミレスにて食事中だ。

「そういえば、名前が一緒だと、どう呼べば良いか…悩むわ」

裕也・夕風 「「ごめんなさい!!」」

そうだな…親からしたら同じ名前がいる訳だからなあ…

「良いのよ。私の場合は上の裕也を「あにゅーくん」、下の優弥を「おとゅーくん」、上の祐奈を「あねゅーちゃん」、下の夕風を「ゅーちゃん」って呼ぶから♪」

その流れで行くと夕風が「いもゅーちゃん」になる可能性があったが…良かったちゃんと考えてた（汗

「でも、私は良いけど…なおさんは」

「裕也兄、優弥弟、祐奈姉、夕風妹」

兄妹・姉弟 「「「簡潔だ!？」」「」」

「さっすがなおさーん♪」

兄妹・姉弟 「「「ええええええええええ!!」」「」」

フリーダムにしてマイペース。

それがこの両親である

ちなみに俺と祐奈がおろしハンバーグとペペロンチーノ、夕風と優弥がカルボナーラ、両親がサーロインステーキだ。

うめえうめえ♪

〵〵家族食事中〵〵

買い物からの帰り道、祐奈が話しかけてきた。

「裕也。明日魔法学園に興味は無いか？」

「興味が無いと思うてか？」

祐奈の問いにニヤリと不敵な笑みを浮かべて俺は答える。

その答えに、祐奈は一層笑顔になって：

「ふふっ：そうかそうか♪そうだったな。キミは私、私はキミだ。
興味など無いはずが無い：魔法学園でもよろしく頼むぞ？『私』」

「ああ、魔法の手解きの程、よろしくな。『俺』」

そう言い合った俺達は横向きに拳を合わせ合い、互いに笑いあうのだった。

第三話（取り敢えず服を買おうじゃないか）（後書き）

次回、ついに魔法学園です

設定資料2（前書き）

今回は東崎姉弟の設定資料です。

設定資料2

東崎 祐奈

ひがさき ゆうな

18歳

女

マギユース魔法学園高等部三年生

好きな物

美味しい物、ゲーム、アニメ、可愛い物

嫌いな物

ゴーヤ、菌、虫、ちくわカビとか（嫌いなわけではなく若干苦手なだけ）、

高所、幽霊

身長

173cm

体重

（黒マジックで塗りつぶされているが、裕也と同じ体J（ry）

基本的には裕也と同じ人間。

性格から思考、性癖まで同じである。

ただ違う部分は、誘う様な言動であっても、恐ろしい程初心だということ（笑

ちなみに結構着痩せする。

東崎 優弥

ひがさき ゆうや

男

10歳

マギユース魔法学園小等部四年生

好きな物

美味しい物、本、姉、猫

嫌いな物

虫、苦い物、幽霊

身長

136cm

体重

(夕風により消されたしまった…)

こちらも夕風とあまり変わらず、兄姉からは『ジト目コンビ』として有名(笑)

最近は夕風と結託して何かを企んでいる様だ。

ちなみにシスコンではあるが夕風ほどの愛は持ち合わせていない。

第四話【異世界の車窓から】（前書き）

つなぎ回。&新キャラ登場&決闘フラグ？

第四話【異世界の車窓から】

裕也「朝だ!」

祐奈「月曜だ!」

裕也・祐奈「魔法学園だぁー!」

ベランダにて二人で叫ぶ。

今日は待ちに待った魔法学園見学&入学（予定）の日だ。

「ほらほら、あねゆーちゃんにあにゆーくん!ご飯ですよー!」

裕也・祐奈「うえーい!」

まずは腹ごしらえDA!!

〓少年少女食事中〓

裕也・祐奈「いってきまーす!」

両親「いってらっしゃーい」

魔法学園の行き方は列車らしい。
魔導列車『DL2000』、見た目は昔のSLだ。

吐き出る黒い煙は魔力の残滓だそう。

ぼんやりと外を眺めていると、祐奈はカバンから教科書のようなものを取り出していた。

「何してんだ？」

「うむ、キミに魔法の最低限の知識を、と思ってな」

「ほむほむ：しかし何故だろうか、その知識が頭にあるぞ？」

そう。

魔法に関する最低限の知識が、俺の頭にはある。
それが何よりの謎だった。

「ふむ：思うに、私とキミが同一存在であることから、キミと私の記憶、知識が同期したと考えられる」

つまりはこうだろう。

世界をパソコン、俺と祐奈をiPhoneのようなデバイスとしよう。

世界に祐奈（iPhone…A）の記憶^{データ}が入っており、そこへ俺（iPhone…B）が入り（接続し）、祐奈（iPhone…A）の記憶^{データ}を同期し、その逆：俺（iPhone…B）の記憶^{データ}も同期されるということ。

ん？ということは：

「無論、キミの性癖から趣向まで網羅しているぞ（キリッ）」

「今すぐ忘れろい!!」

「ふふっ…

だ が 断 る !」

「オンドウルルラギッタンディスカアアー!! (OWO#)」

?? 閑話休題

「知っているなら尚更、復習として確認だ」

「ok ok。」

えーっと…

- ・魔法は大まかに二種類。大気中のマナを扱う属性魔法。マナの集合体『精霊』の協力を乞う精霊魔法。

- ・通常は杖などは使用しなくとも魔法は使用可能。しかしその分初心者の場合は失敗しやすい。

- ・飛行魔法も同様

- ・使い魔を召喚することで前衛、若しくは後衛を任せることが出来る。

…こんなもんか？」

「魔法学園の基本としては上出来だ。それを頭に入れておけば色々なものに属性の有無はあるが、優劣は無い。ただ混合魔法のときに失敗しやすいかそうで無いかの違いだ」

「へー…祐奈の属性って？」

「私か？私は雷と風だ。ついでに教えておくが、この世界での魔力基準は『リリなの』と同じと考えて良い」

「おお、幸運幸運♪分かりやすく助かるぜ。…で？祐奈は？」

「SS+だ。これでも学年一位の魔力量だぞ？」

「すごっ！」

そんな他愛も無い話をしていると、俺たちの話している個室（実はハリポタっぽい列車で、コンパートメント個室となっている）のドアがノックされた。ノックしているのは群青色の髪のサイドポニーの女の子だった。

「祐奈ちゃんおはよー！一昨日ぶりだねっ」

何とも元気な子だな。

何処となく「なのはっぽい」

「あおの青廻か。おはよう」

「はいはい♪…おやおや？そちらの少年くんは？」

「ああ、私の親戚でな。東崎裕也だ。弟と同じ名前だが、大丈夫だろう」

「東崎裕也だ。よろしく」

「ふむふむ。おっけ、” 覚えた ” よ！ボクは『青廼菜花』あおのなのは。祐奈ちゃんなのはの同級生なんだ！よろよろ♪」

マジで魔王まのほうでした。

祐奈の記憶ではこうだったな…

水と鉄の属性で、変幻自在に武器や姿を変えるトリッキーな戦いをするテクニシャン。

物量によるゴリ押しも得意なそうだ。

得意武器はハルバートだそうで。

「さてさて、ボクもご一緒して良いかな？」

祐奈「あぁいいぞ」

そして青廼はそのまま祐奈のそばに座る。

席的にはこんな感じ。

祐 窓 裕

菜 間 荷物

良い感じに狭くて落ち着く…♪

一人ほんわかしていると青廼が話し掛けてきた。

「ねね、裕也くんってさ、もしかして魔法学園に入るの？」

裕也「ん、ああ。その予定だ」

「そっかそっか♪年も一緒っぽそうだし、同じクラスになると良いね！」

青廻が和やかに言うと、祐奈が思案する様な表情で発言してきた。

祐奈「だとすると少し厳しいぞ？私たちのクラスのクラスはAAから最大値であるSSSの魔力を前提条件に魔力を上手く扱うことが条件な上位クラスだ。まあ、魔力と親のコネだけで来る役立たずも多くいるがな」

最後ら辺を話す祐奈の顔は、忌々しいと言わんばかりの怒りの表情だった。

それを見た青廻が原因となる話をした。

「祐奈ちゃんね、ほらほら、色々パーフェクトでしょ？容姿端麗、品行方正、頭脳明晰、運動神経抜群：それに目を付けたワグマールっていう魔法貴族のドラ息子が執拗に祐奈ちゃんに迫るんだよ。結構ワグマール家も爵位が上だから教師たちも何も言えなくて、結局ちゃっかいだして去って行く感じなんだよ」

裕也「よし、そいつ殴ろう」

「ちょ！？」

ちょっと聞いててイラッと来た。

人間、欲望は大切だよね！

「裕也くん何言ってるの！？相手はコネ使ったと言っても魔力はAAだよ！？魔法初心者の裕也くんじゃ…」

裕也「青廻」

「!?!」

裕也「ある男は言った。

『男がやってはいけないことが二つある。女の子を泣かせることと
…』」

裕也・祐奈「『『食べ物を粗末にすることだ』…!?!』…ふふ」

突然言葉をかぶせてきた祐奈に顔を向けると、祐奈は笑っていた。

祐奈「流石だな。ここで天道語録を出すとはな…殴るときは手伝わ
せてくれ。いい加減我慢のリミットでな」

裕也「…おう」

手を取り合う俺達。

俺たち二人が揃えば、怖いものは何も無い!

「こ、これはこれは! すごいことになるのかな…!」

青廻がそう呟いていたことを俺たちは知らないでいた。

第四話【異世界の車窓から】（後書き）

次回、魔法学園見学です

第五話《おいでませマギユース魔法学園！》正八面体なのに天使とはこれ如何に

第五話です。

正八面体でみんな大好きな使も：天使が出ますよ。

放送したばかりの「あれ」要素も今回からスタート！

第五話《おいでませマギユース魔法学園！》正八面体なのに天使とはこれ如何に

一面に広がる青い空。

目の前を覆い尽くすほどの広い海。

そして壮大な威圧感を感じさせる白い学園。

裕也「それがまさかの隔離島とな」

「け、結界上の問題なの！！決して、決して！魔法の流れ弾が危ないとかじゃないから！！」

祐奈「おk、とりあえず落ち着け青廻」

魔法学園生活、始まっちゃいます。

青廻とはここで別れ、俺達は学園長室へと向かった。

…バカテスの学園ちよ…ババアでないことを祈る。

あんな妖怪ババアが学園長だったら即座に逃げてやる！

…そう思っていた時期が、僕にもありました。

「アリス・クロフォードよ。ここの学園長だから、よろしくね？」

Niceおっぱい！Nice過ぎるおっぱいです！
深緑のローブから浮き出るNiceなおっぱいが何とも…は！殺気
！？

そう思って下へしゃがむと、頭の上を何かが振り抜かれる。後ろを
見ると回し蹴りを行った後の祐奈の姿が…ってえ！

裕也「あぶねーだろ阿呆！」

祐奈「やかましい！このおっぱい星人！そんなに大きいおっぱいが
好きか！！」

裕也「おっぱいは全て我々のご褒美です！」

祐奈「欲望がフルスロットルだぞお前！！どうした！？学園の魔力
に宛^あてられたか！？」

おっぱい万歳！

〃〃少女肅清中〃〃

「いい加減生徒をからかうのは自重してください！！この文句を言
い続けてもう五年ですよ五年！！」クドクドクドクド

「うう…良いじゃない。抑えきれない欲望というか…ほら、欲求
不満？」わふー

「張っ倒すぞ欲望学園長が！！」うがー！

いやあ、よもや学園の長とも言うべき人がチャーム…魅了魔法を使
うとは思わなんだ。

今は学園長の右腕である高等部の学年長であり、学園長の妹…ベル

ガ・クロフォードさんが学園長を正座させて説教中です。
反省の色はない様です。

祐奈「あ、あの…ごめん。さっきの謝るから、ほら、だから関節技を解いてくだ 関節がギリギリと音を立ててええええ〜!!」

祐奈？ 現在お仕置きとしてコブラツイスト中です。

― 閑話休題

「遊子：祐奈さんのお母さんから聞いているわ。ようこそ、マギユース魔法学園へ。私達は貴方の来訪を歓迎致しますわ」

学園長が今更過ぎるカリスマを放つ。

ベルガ学年長が呆れ顔だがスルーらしい。

「さて、早速だけどクロフォード学年長。裕也くんの魔力検査を。祐奈さんはそのまま自分の教室に戻ると良いでしょう。遅刻に関しては私の許可があったと言っておく様に」

「「はい！」」

そして学園長の指示通りに二人は動いた。

「「失礼しました」」

学園長室から出た途端、ベルガ学年長から謝罪の言葉が出てきた。

「ごめんなさいね二人共。あんな姉さんで…」

祐奈「その分、学園が楽しいのでプライマ0ですよ」

裕也「右に同じく。堅物な人がやるよりかは気持ち楽ですよ」

「…ありがとうね、二人共」

…苦勞してそうだな、ベルガ学年長（汗）

祐奈と別れ、俺達は小さい体育館の様な場所へ来ていた。

――第二小体育館

ベルガ学年長曰く、この第二小体育館は魔力鑑定、使い魔召還が主な用途となっており、使う機会が少なく、埃が被りやすいと愚痴っていた。

第二小体育館の中は薄暗く、館内の中央に薄く水色に輝く10メートルほどの魔方陣と、その上でも20メートルほどの六角水晶が淡い水色に輝いていた。

「ほおー…暗闇に薄い光を放つ水晶とは……夢がありますね」

「あら？意外にロマンがわかる人？」

「自分からでは何とも言えませんがね…でも、この光の具合や薄暗さは、恐らく魔法に必要な集中力を高める空間としても有効かと」

「へえー…まさか初見でこの利用コンセプトを見抜くなんて。祐奈さん以来ね」

「はあ…（ま、一応俺だし）」

そんな他愛も無い会話を終え、準備に取り掛かった。
先ずは潜在魔力鑑定。

これで魔力のランクを決めるらしい。

方法は簡単。何も考えず浮かぶ六角水晶を触ればいいだけらしい。

「それじゃあ準備は良いかしら？」

「いつでも！」

「では、始めなさい」

何も考えず、触る。

自信も要らない。

恐れも要らない。

ただ、触るだけ。

「……出たわ。凄いわね…祐奈さんと同じSS+か…属性も同じ風と雷。ここまで一緒だと疑うものがあるわ…」

「うえ！？」

「冗談よ」

疲れきった表情で言うベルガ学年長だが、その目はギラついていた。まるで、これから面白いことが起こる…と、言わんばかりに。

次は使い魔の召還である。

使い魔召還用のゲートを開く道具、『ゲートカード』を魔方陣の上で燃やすことで、自分の魔力に合った使い魔が召還されるそうだ。しかし、あくまで『魔力に合った使い魔』であるため、使い魔側が契約に応じない場合、別の使い魔候補が現れるシステムになっているらしい。

無論、術者側が契約しないでいる場合もあるらしい。

双方の合意が有って初めて使い魔契約が成されとのこと。

そして、出て来た俺の使い魔は……

人…と言うわけでもなく。

大海の様な澄んだ海色をした正八面体の浮かぶ水晶体…そう、『新世紀エヴァンゲリオン』のTV版や新劇場版でもその猛威を振るつた存在…

「ラミエル…だと!?!」

(天使系使い魔の中でも高ランクの使い魔を呼び出すだなんて…祐奈さんも機巧系使い魔の高ランクな使い魔を呼び出していたし…この二人、何者なの?)

少し放心状態だった俺の脳内に情報が流れる…膨大なのか、はたまた質の問題なのか。情報流出で頭に激痛が走る。

「うぐ…! ぬううつ…!」

【天使系SSS級使い魔…ラミエル】

個体能力…形状変化

使い魔補正…防御&mp;魔防御+150・攻撃&mp;魔攻

撃＋200・精神＋20

属性…鉄・雷

単体魔法…ストーム・極雷砲・拒絶障壁

・使い魔の一言

『……よろしく』

…え？何これ。何なのこれ。

極雷砲つてもしかして加粒子砲のこと？形状変化って…しかも新劇場版の方のラミエル！？

…サイズは全長1メートル半くらいだけどさ。

使い魔契約は、どうやら成功らしい。

ラミエルっぽいのが描かれたゲートカードをベルガ学年長から受け取った瞬間、第二小体育館の入口から大きな音を立てて教員らしき人が入ってくる。

「べ、ベルガ学年長！！」

「何ですか騒々しい！」

「第一運動場に、地下ダンジョンから抜け出したモンスターがつ！」

ベルガ学年長はその報告に驚き、ホログラムモニターのような物を出して、第一運動場らしき場所を映し出す。

そこには、身体にオリオン座のような紋様を胸に刻んだ2メートルくらいの赤褐色で人型の怪物…って、どう見てもオリオンゾディアーク！？

「ゾディアーツ…仮面ライダーフォーゼの敵。今回は第一話のゾディアーツをモチーフの怪物」

「あれはオリオンゴレム！？どうしてボス級のモンスターが…」

オリオンゴレムと呼ばれた赤褐色のモンスターは光弾や格闘で破壊を楽しんでいる。

そして俺は、そこで逃げ惑う人混みの中で使い魔らしき中世騎士の様な後ろ姿と見覚えのある人物がしんがり殿をしていた。

間違いない。

紛れもなく祐奈その人だった。

騎士が足止めをし、祐奈が避難誘導している。

それを見た瞬間、俺は走り出していた。

「……！！？」

後ろの方でベルガ学年長が何か言っているが聞こえない。

俺はただ、走っていた。

目指す先は――

――第一運動場。

第六話へSSS級使い魔のパワー・レッツギアチェンジ！魔法キターーーーー！

今回は色々改変した『あれ』が登場！

録画した本編を見ながら作っちゃいました^^；

感想くれると嬉しいです！

第六話へSSS級使い魔のパワー・レッツギアチェンジ！魔法キターーーーー！

???? 第一運動場

ここは普段、体育や模擬戦で賑わっている。

しかし、今は違う喧騒が第一運動場を支配していた。

「くっ…！（想像以上にキツイな…使い魔との同調、つまり戦いに集中しなければ使い魔での戦闘は厳しくなる。特に私の使い魔のような遠隔指示型は…他の生徒達も随分パニック状態だ。その場凌ぎにしかないか！）」

急いで第一体育館へ行け！」

その喧騒の中で黒髪を後頭部の上でまとめあげた髪型の少女、東崎祐奈が率先して避難誘導を行っていた。

『（我が主！幾ら我が自律状態で足止めと言ってもタカが知れている。主も早急に退避を…）』

赤褐色の怪物と戦う中世の騎士のような使い魔、機巧系SSS級使い魔…名称『ナイトギア』が魔力パスによる思念会話で主である祐奈に退避をするように進言する。

しかし彼女は…？

「（馬鹿かお前は！）」

『（な、何を…！？）』

「（別にお前を信用していないわけではない。しかし、私達マギウスは使い魔と共に戦う者だ！お前を置いて逃げる主になど、私はな

りたくない!!」

????逃げなかった。

自らの相棒とも言うべき存在を置いて、自らのみ安全圏に行くなど
以ての外。

何より、祐奈自身の矜持プライドが許さなかった。

逃げる生徒の姿も漸く少なくなってきた。
しかし、その時だった。

生徒の一人であろう低身長的女生徒が転んでしまう。

それに、最悪のタイミングで赤褐色の怪物の胸から光弾が放たれ、
ナイトギアを抜けた光弾が女生徒に迫る。

????ドクン…

祐奈の耳には、やけに心臓の音が響く。

周囲の光景もスローモーションのように遅く感じる。

光弾は女生徒への直撃ルート。

光弾のスピードは祐奈が速度上昇の魔法を使っても…そもそも唱え
てる間に着弾する。

女生徒、祐奈の顔には、絶望のみが映し出されていた…

しかし、状況は一変する！！

????ガキイイイイン……

辺りに響く、激突音のような甲高い音。

女生徒の前には横六角形のオレンジ色の壁が立ち塞がっており、光弾を防いでいたのだ！

「…ふう。ギリだったな」

女生徒の後ろからの突然の声。

祐奈にとっては馴染みがあり、女生徒にとっては頼もしく、安心感がある声だった。

その声の方向には、黒のベストとスラックス、白いカッターシャツに赤いネクタイ、頭には黒いソフト帽の男……？

裕也「正義のヒーロー、東崎裕也の登場……ってな」

……？東崎裕也、その人だった。

裕也の傍には青い正八面体の浮遊する物体が存在し、魔力からして

横六角形の壁は物体が発しているようだ。

祐奈「裕也！？何故ここに…」

裕也「知るか。気付いたら走ってた。以上！」

祐奈「終わらすな馬鹿！」

裕也「説教は後だ。お前、魔力が不安定じゃねえか」

祐奈「ぐ…」

裕也「そこのお嬢さんと騎士連れて退いとけ。バトンタッチだ」

祐奈「……すまない」

裕也の言葉に祐奈は渋々承諾し、女生徒を騎士に担がせ、遠くへ退避する。

裕也は祐奈が去ったのを確認すると、近付いて来る赤褐色の怪物：オリオンゴレムに向かい、対峙する。

『（対処法…ある？）』

「（無論だな。しかしイコール勝率とは限らないけどな。）」

『（……だめだめ）』

「（言わんというて！）」

ラミエルの質問に裕也は軽く答えるも、文字通りラミエルからダメ出しを受ける。

「（…っと、馬鹿やってる場合じゃなかったな。ラミエル、『これ』って出来るか？）」

『（…んっ。……出来る）』

「（おし、じゃあやるぞ）」

『(うん)』

裕也の提案を受け入れたラミエルは、粉々のようにみえる欠片となり、欠片が裕也の腰に巻き付きベルト状になってバラバラの水晶面が砕け、綺麗な造形品のようになる。

ベルトの前：下腹部にあたる部分には大きめの機械があり、その傍にはレバーのような物がある。

裕也は機械の前面部側にある左右の二つずつのスイッチを下ろす。すると、中心部の液晶画面と思える場所に、胴体が透明で、両手足が赤く光る人の絵が映る。

すると、ベルトから女性の機械音声流れる。

《3 (スリー) ・ 2 (ツー) ・ 1 (ワン)》

「変身！」

左腕をガッツポーズのように上半身の左半身を前面に回し、払う様に右半身に変え、レバーを一往復させる。

そして右手を上に掲げる。

すると、ベルトからジェット噴射のような烈風と、テクノ系の音楽、上に向かう機械的な円環が青い光を放ち、裕也の身体を青い水晶で包む。

上に掲げた右手で振り払う様に振り下ろすと、身体を覆っていた青い水晶は砕け散り、頭、胸、背中、両手、両肩、両足に青いクリア

パーツの装甲が装着されている。

右手の装甲には丸い水晶。

左手の装甲には四角い水晶。

右足の装甲にはバツの形の水晶。

左足の装甲には三角形の水晶。

背中には何かの噴射口の様な物がある。

頭は、両耳に青いアンテナパーツと、両目を覆う青いバイザー、そのバイザーの奥ではオレンジの双眸が映っていた。

『名前は…そうだな。』

仮面ライダーフォーエル！己が信義を通らせてもらおう！』

裕也の提案…それはこの世界に移って来る前にテレビで一話しか見れなかった特撮番組『仮面ライダーフォーゼ』を模した装着装甲だった。

ラミエルの形状変化は無機物の形にしか対応出来ず、当然人の形にもなれなかった。

ラミエル自身のスピードもそれ程速く無く、言うなればラミエルは『大火力固定万能砲台』なのだ。

…まあ、裕也本人としては男の夢である変身をして見たかったただけだが。

『さてさて、行きますか！』

裕也：フォーエルはオリオンゴレムに殴りかかるがオリオンゴレムの両腕で防がれ、殴った手が痛くなるが気にせず二撃目を当てる。

しかし、攻撃後の隙を突かれ、横に飛ばされる。

フォーエルは直ぐに体制を立て直し、オリオンゴレムに飛び掛って押し倒す。

そしてオリオンゴレムの襟首を掴んで投げ飛ばす。

オリオンゴレムも直ぐに体制を立て直し、フォーエルと組み合う。

フォーエルは組み合った状態からオリオンゴレムに前蹴りを食らわし、距離を取る。

『まずはこれだ！』

フォーエルはベルトに嵌っている四つのスイッチの、オレンジのスイッチを押す。

《ロケット・オン》

機械音声と共に右手の丸い水晶から輝く欠片が飛び出し、肘から下の腕が青く不透明な四角錐柱に包まれる。

その四角錐柱の形は何処と無くロケットを彷彿とさせる形だった。

すると今度は肘の辺りから魔力炎がジェット噴射のように噴き出し、空中へ飛び上がる。

オリオンゴレムが光弾で狙うがフォーエルの素早い動きで当たらない。

フォーエルがオリオンゴレムに一気に近づくと四角錐柱の先端で殴

る。

オリオンゴレムはそれをガードするも勢い＋推進力＋腕力によるパワーに耐え切れず4メートルほど後ろに吹っ飛ばされてしまう。

しかし、フォーエルも四角錐柱の扱いは完全では無く、制御するのに精一杯なのだ。

〈予想以上に推進力が強い……！そしてぶっちゃけ酔うぞこれ！〉

フォーエルが地面に降り立ってオレンジのスイッチを引く。

腕の四角錐柱は再び欠片に戻って丸い水晶へ戻る。

『うえ……気持ちわり……！』

軽口を叩きながらもオリオンゴレムの攻撃をいなすフォーエル。

そして隙を見て飛び掛って頭突きをかます。

オリオンゴレムが怯んだ隙に、オレンジのスイッチの隣の青いスイッチを押し倒す。

《ランチャー・オン》

今度は右足のX型の水晶からも輝く欠片が飛び出し、ミサイルラックの様な四角柱となる。

『よし、これなら……っとうお！？』

フォーエルが構えた瞬間に五発のミサイルが無茶苦茶に飛び出し、近くの校舎や地面にぶつかり、爆発する。

『やっべ…』

その時、左端の黒いスイッチが光り、着信音の様な音が響く。

『お?』

フォーエルは疑問に思い、黒いスイッチを回す。

《レーダー・オン》

すると左腕の四角い水晶からも輝く欠片が飛び出し、左腕にくっつくようにパラボラアンテナの様な水晶体となる。

液晶部分と思われる場所には見知った顔があった。

【馬鹿かお前! 学校を破壊する気か! !】

祐奈である。

『え? 何でお前が! ?』

【お前の携帯に掛けたら出来た!】

『うそ! ? : : : つか戦闘中に携帯に出れるか! ! !』

【喧しい! フォーゼなら私の知識にもある。レーダーで捕捉しろ!】

『言われなくても! ! !』

フォーエルはオリオンゴレムを踏み台に飛んで、ジェット噴射で距離を取って、パラボラアンテナの部分をオリオンゴレムに向けて照準を合わせる。

『よっし、ロックオン!』

くらええー！』

再装填したミサイル五発を撃ち放ち、それを見事命中させる。

【次は接近戦を仕掛けろ。ランチャースイッチをチェーンソーと変えろ】

『あいよ！ラミエル！ギアチェンジだ！』

『（了解）』

フォーエルの青いスイッチが飛び出して消え、水色のスイッチと入れ替わる。

《チェーンソー》

そして今度は水色のスイッチを引き起こす。

《チェーンソー・オン》

するとミサイルラックの代わりにチェーンソーの付いた重機のような装甲が装着される。

チェーンソーの刃は刺々しい水晶となっている。

『魔力伝達良好！いくぜ！』

フォーエルはオリオンゴレムに近付いて、右回し、左回し蹴り二回の順にチェーンソーキックは放つ。

『だああ、うりやああー！』

そして前転の要領で背中のジェットで空中前転しながら右足のチェ

インソーを振り下ろし、オリオンゴレムを縦に刻む。

『っうし！…おおっと！？』

しかし、技後硬直の隙を狙ってオリオンゴレムの胸から複数光弾が放たれ、フォーエルは吹っ飛ばされてしまう。

フォーエルは直ぐ様体制を立て直し、チェーンソーのスイッチを倒して普段の足に戻す。

右にロールしながら光弾を避け続けるフォーエル。

そこでオリオンゴレムはとどめと言わんばかりに光弾の発射口にエネルギーを溜める。

『そう何度も同じ手を食らうかっての！』

《ロケット・オン》

再びオレンジのスイッチを押し、右腕に四角錐柱が現れ、上空へと再び飛び上がる。

飛び上がる瞬間に光弾が発射されるが、やはり当たらず…上空へと逃げられてしまう。

『そろそろかな』

今度は黒いスイッチの隣にある黄色いスイッチを捻る。

《ドリル・オン》

すると左足の三角形の水晶からも輝く欠片が放たれ、螺旋状に組みれた三角錐柱となる。

『よっし！トドメといくか！』

【な！？おい裕也！】

『話は後！』

祐奈の声を無視して黒いスイッチを後ろに回し、パラボラアンテナの様な水晶体を消す。

そしてフォーエルはベルトのレバーを一往復させる。

《ロケット・ドリル：リミットブレイク！！》

その機械音声が流れると、左足のドリルの回転数が上がり、唸りを上げて紫電を纏う。

それに気付いたオリオンゴレムは迎撃するかのように上空のフォーエルに向かい、光弾を乱れ撃つ。

しかし、それも無駄に終わる。

『くらえ！ブーストドリルキック！！』

四角錐柱の推進力により突破力が強化された螺旋のライダーキックがオリオンゴレムに向かい、光弾を物ともせず、オリオンゴレムを削り、貫いた。

瞬時に全ユニットを解除したフォーエルはオリオンゴレムを背後に立ち、右手でスナップした瞬間、オリオンゴレムは爆発し、消えていった。

『ふう…戦闘終了、つとね』

フォーエルがその言葉を言うと、ベルトや装甲から水晶体がバラけて離れ、欠片同士が集まると正八面体の姿のラミエルとなった。

「（お疲れ。カードに入っていていいぞ）」

『（わかった…）』

ラミエルが輝くと、ゲートカードにラミエルの絵が刻まれた状態のカードが裕也の手に収まる。

そこに、走り近付いて来るのは祐奈だけではなかった。

青廻に小等部の夕凧と優也、ベルガ学年長に学園長までいた。

裕也（さて、これから色々大変だろうけど…頑張るとしますか）

この時、裕也は気付かなかった。

校舎の影で裕也を見る者。

校舎の屋上から裕也を見つめる者に…

第六話へSSS級使い魔のパワー・レッツギアチェンジ！魔法キターーーー！

仮面ライダーフォーエル

基本状スペックはフォーゼと同じ。

両耳、胸、背中、両肩、両手、両足に青いクリアパーツの装甲。

両耳はアンテナパーツとなっており、目は青いクリアバイザーが装着されている。

右腕に丸い水晶

左腕に四角い水晶

右足にX型の水晶

左足に三角形の水晶

背中にはジェットパーツ

単体での飛行、浮遊が可能だが、魔力を著しく消費し、速度も遅い。

63

＊スイッチギア

フォーエルの武装を確実に顕現させるスイッチでもあり、武装に含まれる魔力を暴走させないための歯車的役割を持つアイテム。

・ロケットスイッチ

オレンジ色がメインカラーのスイッチギア。

スイッチタイプは基本的なスイッチタイプ（押す・引く）。

武装形態は四角錐柱状のロケットの水晶の『ロケットギア』

このロケットギアを使う事で高速度の飛行と長時間の滞空を可能にした。

・ランチャースイッチ

青色がメインカラーのスイッチギア。

スイッチタイプはレバータイプ（押し倒す・引き起こす）。

武装形態は四角いボックス型の水晶のミサイルラックの『ランチャーギア』

これを使用するには後述のレーダーギアを使用しない限り無茶苦茶にミサイルが飛ぶ。

・ドリルスイッチ

黄色がメインカラーのスイッチギア。

スイッチタイプは摘みタイプ（捻る）。

武装形態は三角錐柱の螺旋状の水晶ドリルの『ドリルギア』

必殺用。歩きにくくなってしまう。

・レーダースイッチ

黒色がメインカラーのスイッチギア。

スイッチタイプは丸レバータイプ（前回し・後ろ回し）。

武装形態はパラボラアンテナの様な水晶体と、腕装甲に液晶画面がついた『レーダーギア』

変身時の唯一の連絡手段。携帯に掛けるとレーダーギアに繋がるらしい。前述のランチャーギアのロックオン機能や解析機能を持っている。

・チェンソースイッチ

水色がメインカラーのスイッチギア。

スイッチタイプはランチャースイッチと似たスイッチレバータイプ

（起こす・倒す）。

武装形態は重機のような水晶装甲に足首を関節部とした水晶の刃を持ったクリスタルチェーンソーの『チェーンソーギア』
ドリルギアより使い勝手が良く、チェーンソー部分に魔力を纏わせる事で防御を削り取ることが可能。

＊リミットブレイク

各ギアの性能を極限まで高める機能。Wで言うならマキシマムドライブ、OOOで言うならスキヤニングチャージである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1978w/>

俺がお前で、私がキミ！？

2011年10月9日14時54分発行